

交換留学生向け「グローバル化支援インターンシップ」実習 — 「国際交流歴史ツアー」コーディネーター育成 —

恒松 直美

はじめに

本稿では、2012年度に新たに開講した広島大学短期交換留学プログラム（Hiroshima University Study Abroad Program, HUSA プログラム）¹向け「グローバル化支援インターンシップ・コース」に焦点をあて、交換留学生インターンが地域市役所と連携し、HUSA プログラム留学生向けの「国際交流歴史ツアー」を企画・実行するコーディネーターを育成するインターンシップについて論じる。本インターンシップでは、留学生の知見を地域社会の国際化とグローバル社会への対応策に生かすとともに、大学の国際教育と地域社会を連携した支援システムを構築することを目指している。大学からは留学生の外国人の知見を地域社会に貢献し、地域社会からは社会人の実践知を学生に提供する形で相互に協力できる交換留学生インターンシップの授業の構築を目標としている。本授業は、2012年度に「派遣型」から「学生主導型」へと新しくパラダイム転換し、留学生インターンが自ら企画を提案し、仕事に従事する授業であり交換留学生を目指すハードルは高い。そのため厳しい研修を日々積むこととなるが、留学生インターンは自らの意見が反映され、地域社会に生かされることを実感しエンパワーメントする姿を見せている。本稿では、交換留学生インターンが、担当教員の総括的監督のもとリーダーシップを発揮し短期交換留学プログラム留学生向けのツアーを実行した体験をもとに、多様な価値観を持つ留学生の知見を生かし、地域社会とつながりを築きつつ企画する「国際交流歴史ツアー」のコーディネーター育成の挑戦について考察する。

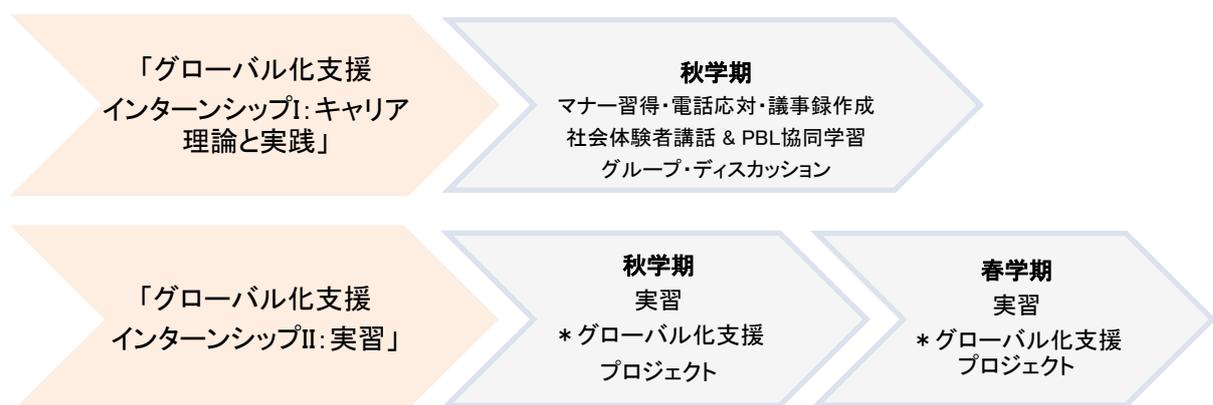
2012-2013年度の本授業では、主に2つの「グローバル化支援プロジェクト」を交換留学生インターン5人が行った。地域企業のグローバル化戦略を支援するための市場調査と、本稿で論じる「国際交流歴史ツアー」コーディネーターのインターンシップである。これらのプロジェクトでは、交換留学生の特性を生かし、グローバル化への対応に直面する地域社会への支援を目指し、調査と企画を行った。これらのプロジェクトは、交換留学生インターンの持つ日本人とは異なる視点と知識、そして日本社会への強い興味を最大限に生かす場となった。本稿では、2つのプロジェクトのうち、「国際交流歴史ツアー」コーディネーターの育成に焦点をあて、交換留学生の特性を生かして地域社会と協力するインターンシップの授業の構築について考察する。

「グローバル化支援インターンシップ」授業の構成と理論的背景

本インターンシップを行う交換留学生は、世界各国の協定大学から1年間または1学期間広島大学に留学している。広島大学短期交換留学プログラム（HUSAプログラム）に所属する交換留学生（HUSA留学生）のみ、本「グローバル化支援インターンシップ」を受講可能であり、本授業の受講生を略して「HUSA インターン」と称している。HUSAプログラムに参加する留学生は、毎年9月末に来日し、大多数が約1年間滞在し、翌年の7月末にプログラムを修了する。HUSAプログラム留学生の出身国は北米・オセアニア・アジア・ヨーロッパの20カ国を超え、協定大学は2013年時点で60大学を超えている。そのうち、これまでインターンシップの授業を受講した交換留学生は、日本語能力の高い留学生が留学してくる傾向のある中国・台湾・韓国出身が圧倒的に多い。²日本の地域社会の人々と連携して仕事を行うためには、学生自身が日本語でコミュニケーションがとれることが必須条件となる。上級レベルの日本語能力を要求されるため、HUSA インターンの出身国は偏る傾向にある。

本授業は、「グローバル化支援インターンシップ I: キャリア理論と実践」（後期開講）・「グローバル化支援インターンシップ II: 実習」（後期・前期の通年開講）の2コースで構成される。「II」の授業の受講条件である「I」の授業は実習の研修の役割を果たし、インターンとしての心構え、日本社会でのマナーと儀礼、電話対応など、日本で仕事をするための必要事項を学ぶ。また、グループ・ディスカッションや「社会体験者講話」とPBL（課題発見解決型）協同学習により論理的思考能力とプレゼンテーション能力を高めている。

表1. 「グローバル化支援インターンシップ」 I・IIの授業の流れ



「I」の授業は、来日直後の秋学期のみの開講で、「II」の授業は、秋学期に登録し春学期修了後に成績を出す通年開講である。研修と実習の授業を秋学期に同時に開始し、実習は1年間かけて行う。秋学期の「I」の授業開始と同時にインターンは実務能力を

つける訓練を受けつつ、実習を同時進行するため、学生への要求レベルはかなり高い。2012 年度秋学期に「グローバル化支援インターンシップ I：キャリア理論と実践」に受講登録した交換留学生の出身国は、中国 4 人(女性 4 人)、台湾 2 人 (女性 1 人、男性 1 人)、イタリア 1 人 (男性) の合計 7 人であった。受講を希望したオーストラリア人学生は授業のレベルが高すぎ途中で断念した。7 人のうち、台湾の学生 2 人と中国人女子学生 1 人の合計 3 人が大学院生で他の 4 人は学部生であった。「グローバル化支援インターンシップ II：実習」に登録した留学生は 5 人である。中国と台湾出身の 2 人の女子大学院生は II には登録せずボランティアとして関わった。国際交流歴史ツアー企画では、単位未取得の中国出身の大学院生がリーダーシップを発揮してツアーを実現可能に導く結果となった。³

広島大学のおかれている東広島市とその周辺の地域との関わりの中でプロジェクトを行う本インターンシップでは、現実的施策として、交換留学生の日本語能力と日本文化の理論的理解が不可欠である。同時に、外国人の持つ知見を特性として生かすことが地域社会との相互連携を実現する鍵となる。⁴ 新パラダイムの機能を理解するため、各留学生インターンを一人ずつ各企業に派遣した 2011 年度までの「派遣型」インターンシップと担当教員の総監督のもと「学生主導型」として行う本インターンシップの比較を表 2 に提示した。

表 2. 「派遣型」(2003-2011 年度)と「学生主導型」(2012 年度開始)の相違

「派遣型」インターンシップ	「学生主導型」インターンシップ
<ul style="list-style-type: none"> ● インターンを各社・各庁に派遣 ● 交換留学生インターンを 2 週間受け入れる企業を見つけるのが困難 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「グローバル化支援プロジェクト」にチームで取り組む ● 市役所・地域企業の 1,2 の組織と連携するため、各社を教員が訪問する必要がない
<ul style="list-style-type: none"> ● 教員による各社・各庁への訪問、学生を連れての訪問、各社との調整をすべて教員が行う 	<ul style="list-style-type: none"> ● 教員の監督・指導のもと、学生がプロジェクトの企画を提案し、地域社会の支援の仕事を行う
<ul style="list-style-type: none"> ● 受け入れ企業・官公庁側の負担が大きく、継続を打ち切る企業が多くなった 	<ul style="list-style-type: none"> ● 仕事が企業・官公庁の支援となるため、受け入れ先との対等な関係が構築できる
<ul style="list-style-type: none"> ● 派遣されるインターンが「顧客的」な存在で、補助的業務や見学をする傾向にあり、実際の仕事に主導として関わることはない ● 仕事で意見を述べるなど、主導を握ることがないため、インターンがエンパワメントせずモチベーションが上がりにくい ● 期待マネジメントが行われなため、インターンが実力を超えた過度の期待を抱き、理不尽な不満を持つことがある 	<ul style="list-style-type: none"> ● インターンが顧客的立場から脱却し、インターンの自己効力感が高まる ● 学生は電話対応・電子メールでの対応・議事録や報告書の作成ができるようになる ● 仕事の過程すべてに従事するため、企画・実行の全体の経緯を学ぶ ● 意見が反映されるためエンパワメントし、自ら考えて動くことを学ぶため意欲的 ● 期待マネジメントとして「インターンシッ

<ul style="list-style-type: none"> ● 必要とされる能力のスタンダードを明示しないまま教員が英語と日本語で支援するため、インターン自身が自らの力不足について認識していないケースがあった 	<p>ブ・プレースメントテスト」及び「グループ・ディスカッション」を導入し本インターンシップのスタンダードを明示した</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 受講当初より自身の実力を自覚し、必要とされる能力が明確化された形で実習が進むため理不尽な要求が少ない
<ul style="list-style-type: none"> ● 各自が異なる企業に派遣されるためインターン間の連携や協力がなく、相互の経験を生かせなかった 	<ul style="list-style-type: none"> ● プロジェクトのリーダー・サブリーダーを決め、役割分担をして各インターンの仕事を明確化した ● 各インターンの持つ力を生かし、チームワークによりプロジェクトを成功させるシステムを構築した

本授業は、学生参加型授業であり、アクティブ・ラーニングである。教員による一方的な講義形式の授業ではなく、留学生インターンの能動的な授業参加を特徴とする。交換留学生在が、インターンシップで日本社会と能動的に関わるのは初めての体験であり、そのためには担当教員による徹底した指導と詳細な指示が不可欠である。交換留学生在が日本社会で学術知を実践知に生かす体験学習には、日本の実社会と関わる上での経験知が不可欠であるため、教員の指導なしにはプロジェクト実行は不可能である。本プロジェクトは、現時点ではアクション・リサーチの領域にまでは至っていないが、交換留学生在インターンが地域社会との連携を深め、アクション・リサーチ⁵に挑戦するインターンシップの授業構築も発展の射程においている。

現在、大学教育改革が提唱される中、高等教育の大衆化、情報化、知識社会化により大学で教えられる学問体系が揺らぎ、学生が大学教育により構造化された「知」の習得が困難である状況(天野 2004)にある。体系化され構造化された知を習得することが困難となった現在、教員が一方的に知識を伝授する方法ではなく、学生が意欲的に取り組める学生参加型授業による高い教育効果と教育の生産性が提唱されている(安部ら 1998)。学生参加型授業がもたらす教育効果と培う能力として、安部ら(前掲)は、以下を挙げている。

- コミュニケーション能力
- グループ作業による活発な討論能力・決断力・リーダーシップの育成
- 協調性・共同作業能力・相互反応(interaction)・相互影響(group dynamics)・協調性
- 責任感・人間理解・社会性の把握・能動的行動力・チームワーク能力
- 知識発見・自己発見・自己能力開発

交換留学生在向けの本授業の場合、上記の教育効果に加え、異文化における国際的体験学習としての教育成果も生む。日本の大学への留学により日本語能力と日本についての理論的理解を深めるとともに、地域社会と取り組むプロジェクトにより学術知を

実践の場に応用し、日本語能力の不足とともに理論的理解の不足も実感する。交換留学生インターンの持つ多様な文化的背景と日本文化とが交錯する現場はグローバル社会の縮図である。HUSA 留学生のグローバル・コミュニティの持つ力を生かし、留学生の視点や見解を出し合い、日本のグローバル社会への対応支援として取り組むのが「グローバル化支援プロジェクト」である。「学生主導型」を目指す「グローバル化支援インターンシップ」において、派遣型の「HUSA インターンシップ」⁶から大きく変革した点は、社会体験を持たない留学生インターンが、能力と知識を結集してエンパワーメントしつつ地域社会の支援を行う点である。その課題として、1) 担当教員による総括的指導、2) リーダーシップの発揮とチームワークを生かすシステム構築、3) 仕事をする文化的枠組みの明確化、4) インターンの文化的多様性を生かす企画立案、が挙げられる。

本授業のマネージメントは、多様な言語と価値観が交錯するグローバル社会で人が共存するための現実的施策を考察する機会をもたらしている。1)は、実務経験のない交換留学生インターンが、地域市役所等に電話や電子メールで連絡したり、会議に参加するために、担当教員が研修を行い指導するものである。2)では、様々な国から留学している留学生インターンのチームワークを最大限に活用して協力体制を構築し、リーダーを決めて役割分担を明確にしつつ仕事を遂行する。3)は、地域社会と連携し仕事をする際に機能している日本社会の文化的枠組を理解し、日本語能力と日本社会の理論的理解を活用する。4)は、外国人の知見を生かし、グローバル化への対応や外国人居住者への対応策が遅れている日本の地域社会に貢献する企画に取り組むことを目指す。外国人として日本で生活した体験を生かし、グローバル化への対応に迫られる日本社会に貢献する意義は大きい。

インターンによる江田島「国際交流歴史ツアー」企画のプロセス

1年間広島大学に留学している広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)留学生向けに、広島県江田島市の「国際交流歴史ツアー」を2012年4月21日に行った。交換留学生インターンが、自らも一員である交換留学プログラムの留学生のためのツアーを企画し地域の人々との交流の機会を作る試みである。留学生インターンによる本企画の利点は、単なる見学ツアーではなく、留学生インターンの日本語能力と日本社会の理解を生かし、交換留学生と地域の人々との国際交流を企画し人と人との触れ合いの場を作ったことである。

この企画の発端は、インターン留学生が、留学中に新しい場所を訪れたいとの要望を語った際、担当教員が広島県の江田島市が移住の促進や「お試し暮らし」を行っていることを紹介したことに始まる。留学生の大変嬉しそうな様子を見て、ぜひ広島県

の美しい島を留学生が訪れ交流する場を作りたいとの担当教員の思いも加わり、実現へと向けて動き出した。現在、江田島市は市の活性化と再生を目指し民泊型修学旅行を積極的に推進している⁷。「江田島交際交流歴史ツアー」の企画により、HUSA 留学生と地域の人々との新しい国際交流の機会を作り、江田島市の活性化を支援し、市を世界へと開く新しい可能性を模索するために役立ちたいと考えた。その流れを以下に示す。

表 3. 企画から実行までの流れ

1) 提案と会議	<ul style="list-style-type: none"> ・現地訪問・江田島市役所と会議(担当教員と支援員) ・訪問場所の調査と旅行行程の作成 ・広報ポスターと申込用紙の作成
2) プラニング	<ul style="list-style-type: none"> ・江田島市役所と企画会議・インターンを連れたモニターツアー ・訪問予定場所との連絡・調整 ・バス会社との調整(旅行の行程の調整・確認)
3) 準備と連絡	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の確認と名簿作成・名札カード作成 ・地域住民との国際交流会議の企画・準備 ・訪問地の情報資料の準備(日本語と英語)

1) 提案と会議

A. 江田島市役所訪問 (第 1 回会議)

2013年1月、担当教員と支援員とで江田島市市役所総務部企画振興課を訪問した。「グローバル化支援インターンシップ I: キャリア理論と実践」の授業における「社会体験者講話」の依頼と HUSA プログラム留学生との国際交流企画の可能性について探るための会議を持った。

江田島国際交流歴史ツアー 企画会議

- 江田島国際交流歴史ツアーに向けた企画会議 第1回 (2013年 1月 11日)

<会議参加者> 広島大学: 担当教員・グローバル支援員
江田島市: 江田島市 総務部企画振興課 企画情報係

B. 「国際交流歴史ツアー」企画会議 (第 2 回会議) に向けた準備

- 第 1 回目の江田島市との会議後、今後のツアー企画の発展の可能性をインターンと探っていくため、江田島市のホームページに掲載されている民泊やいちご狩り、江田島のお試し暮らしの情報を授業で配布した。

- 留学生インターンは、未知の地域でのお試し暮らしやいちご狩りへのツアー企画に強い興味を示した。各インターンが江田島について調査し、ツアーのプランを考え、次回の授業で提出することとした。次回の授業で各自の提案をブレイン・ストーミングとして出し合い、訪問先を検討した。
- ツアー企画のリーダーを決定し、HUSA 留学生向け「江田島国際交流歴史ツアー」の旅行日程とツアーの申込用紙を教員の指導のもと作成した。HUSA 留学生に配布する広報ポスターも作成した。

- この過程におけるインターンの学び -

- * ツアー企画には相当の時間と労働力が必要となる。
- * ツアー実行のためには現地を訪問することが不可欠である。
- * 学生から出される多様なアイデアをまとめるプロセスが必要となる。
- * リーダーがリーダーシップをとらなければ仕事が進まない。
- * 皆が協力し敏速に動かなければ企画が進まない。
- * 企画を進行させるためには担当教員の総括的監督と指示が不可欠である。

2) 江田島市役所への担当教員とインターン訪問（第2回会議）

- 2013年2月、担当教員・留学生インターン・日本人支援員がモニター・ツアーを兼ね江田島市を訪問した。江田島市役所の職員と移住者の会である「田舎暮らしを楽しもう会」代表も参加して会議を開いた。旅行日程・申込用紙・広報ポスターを提示し旅行の行程について助言を求めた。市職員や移住者の会の代表からの現地に関する豊富な知識の提供に基づき旅行の行程の改善策を検討した。現地の人々による現地の交通状況の情報提供や訪問場所への事前連絡などの支援は貴重な支援となった。
- 日程を最終決定した。訪問予定の各場所にインターンが連絡し、入園料、入場料、開館時間、人数制限、割引などについて確認した。いちご狩りの滞在の制限時間、価格、参加人数によるディスカウント、持ち帰りの有無を確認した。バス会社からの依頼によりバスの駐車場の有無の確認も行った。
- バス会社に連絡し、旅行の行程と各場所に要する時間を再確認した。
- インターンの一人が議事録を作成し、教員の改訂指導後、授業で配布した。

江田島国際交流歴史ツアー 企画会議

- 江田島国際交流歴史ツアーに向けた企画会議 第2回 & モニターツアー（2013年2月25日）
 <会議参加者> 広島大学： インターン留学生・担当教員・グローバル支援員
 江田島市： 江田島市 総務部企画振興課 企画情報係・
 田舎暮らしを楽しもう会会長

- この過程におけるインターンの学び -

- * モニター・ツアーで現地を訪問することがプランニングには不可欠である。
- * 現地の人々と事前に打ち合わせを行い、情報を得ることがツアー成功の鍵となる。
- * 開園時間、移動時間、バスの駐車場の有無の確認、大型バスの通行可能性等、ツアー経路の確定には多くの確認事項があり時間を要する。

3) ツアー申込書作成と交換留学生への参加者募集・国際交流会の準備

- ツアーのポスターと申込用紙を HUSA 留学生に配布し、参加者を募集した。締め切りを3月下旬としたが、春季休暇中のため情報は周知されにくかった。可能な範囲でインターンが学生に連絡を取りツアー参加者を確認した。
- 江田島市への移住者及び江田島市職員と交換留学生との「国際交流会議」は教員が司会・進行を務めることとした。交換留学生と留学生に慣れていない地域の人々との初めての「国際交流会議」の企画と進行は、経験を持つ教員が企画・進行を務めて場を盛り上げることとした。
- 訪問場所についてインターンが調査し、情報資料を日本語版と英語版とで用意した。参加者がツアーを楽しむためには訪問場所に関する情報提供が必要となる。訪問する各場所の情報を収集して日本語版を作成し、日本語と英語の両言語に堪能なインターンが英語版を作成した。作成過程では必要な内容や理解しやすい掲載方法について教員が指導・助言を行った。ポスターと申込書でツアー行程について簡潔に情報を提供し、ツアー当日、バスの中で訪問場所についての詳細な情報資料を配布することとした。
- インターンは、移住者の会である「田舎暮らしを楽しもう会」代表に連絡し、時間や参加人数、会議場所での昼食の注文数について確認した。

- この過程におけるインターンの学び -

- * 参加者を募集する際、締め切りを守らない学生への対応が必要となることを学んだ。
- * 期限を厳守しない学生に対処する過程で、参加人数の度重なる変更、その変更による他の準備への影響など、企画通りにならない現実への対応策について学んだ。
- * 地域の人々との「国際交流会議」は、国際的経験や行事を企画した経験が実践知となる。会議の内容、進行方法、グループ編成など、会議の企画で考慮すべき重要事項について認識した。多国籍の人々が参加する場では、言語問題への対処方法が必要となること、外国人に不慣れな地域の人々が楽しめる工夫が必要となることを学んだ。
- * 交換留学生のツアーを企画する際、訪問場所について参加者への詳細な情報提供を行うことでツアーがより興味深いものになる。交換留学生の参加者の大多数は日本語で情報が理解できないため、日本語と英語で情報提供の準備が必要となる。

これまで「参加者」としてのみ行事に関わってきた留学生が、「企画者」としてツアー

一に関わった時、全く見えていなかった裏の仕事の存在を認識する。過去、HUSA プログラム留学生は、担当教員が毎年企画する「広島県呉市吉浦かに祭り（秋大祭）ツアー」、「地域ホームステイ」、「地域高校との国際交流会」などに参加してきた。しかし、HUSA 留学生自身が「企画者」として企画に関わったことはなかった。本ツアーは、授業の一環で「グローバル化支援プロジェクト」としてHUSA インターンがツアーを企画する役割を担ったことにより、「交換留学生」という立場を地域社会とグローバル社会との関わりの中で再考する機会となった。立場を「顧客」から「企画者」に転換した時、国際交流を全く異なる視点から捉えることとなる。国際交流やツアーの企画・実行には、多種の役割と仕事があり、要する時間と必要経費を考えて予定を立てる必要性など、企画運営の全体像と必要とされる労力を肌で感じるようになる。例えば、交換留学生インターンがいかに企画の現実を認識していないかを示す例として必要経費の認識がある。2013年1月、「江田島国際交流歴史ツアー」企画を開始した頃、バス借り上げの1日の費用について推測させた際、「千円」、「1万円」、「2万円」と、バスの運転手の日当やガソリン代など全く認識不足の回答であった。2013年度の本授業の受講生も回答は類似していた。中型バスでも5万円以上、大型はさらに高額であることを伝えると、インターン留学生は驚愕の表情を見せた。

過去、HUSA プログラム参加した交換留学生より簡単にツアー企画を要望するケースがあった。HUSA インターンが企画に実際に関わり、仕事を進める体験を持つことにより、「仕事」について何も考えないままそれらの要求がなされることに気づく。行事の企画においては、経費の問題や連絡や交渉を含め、申込み期限を守らない人への対処や能率の良い集金方法など、段階的に仕事が発生することをインターンは実践を通じ学ぶ。ツアーの企画・実行のためには、多くの人の協力を必要とし、綿密な計画と責任感ある行動が必要とされることを身を持って学ぶのである。

江田島市移住者・江田島市役所職員・交換留学生の「国際交流会議」

「江田島国際交流歴史ツアー」の企画において、江田島市への移住者の方々と江田島市役所職員の方々との「国際交流会議」は地域の人々と交換留学生とが共に新しい土地で生活する困難について話し合う貴重な異文化交流の場となった。ツアーでは、訪れた場所の風景を楽しむだけでなく、その文化と歴史を学び、そこで生きる地域の人々と「人」として気持ちを伝え合う場を作りたいとの教員の思いから、国際交流会議の企画を提案した。交換留学生と地域の人々との国際交流会議の達成目標は、

- 世界各国の交換留学生が地域の人々と相互に思いを伝え合う機会を持つ
- 移住者の方々と交換留学生が、慣れていない土地で生活する困難について意見交換をし、異文化理解の第一歩とする

- 世界各国の留学生と地域の方々とで、言語と文化の多様性を超えて相互にコミュニケーションがとれる会議を皆の協力により作り、異文化間で分かち合える場を体験する

本「国際交流会議」の概要を表4に示した。

表4. 「国際交流会議」の概要と参加人数

広島大学短期交換留学プログラム留学生と江田島市職員・移住者による「国際交流会議」	
日時：	2013年4月21日（日）
時間：	13:40-15:15 交流会（13:00-13:40 夢来来交流ゾーンで昼食）
場所：	夢来来 交流ゾーン（江田島市沖美町）
参加者：	1) 広島大学からの参加者：合計 24名
	広島大学短期交換留学プログラム(HUSA)留学生 21名
	広島大学国際センター教員 2名
	グローバル支援員 1名
	2) 江田島市からの参加者：合計 14名
	江田島市職員（総務部交流促進課・商工観光課交流定住促進室）4名
	江田島市への移住者（田舎暮らしを楽しもう会）10名
司会・進行（及び通訳）：	「グローバル化支援インターンシップ」担当教員 恒松
通訳：	各グループ（5グループ）に一人（留学生・教員2人）

HUSA インターン・HUSA 留学生・担当教員・支援員が協力し、参加者全員が会議で意見を述べられるよう企画した。留学生インターンを初め、江田島市職員及び住民の方々も国際的な行事や留学生との交流に慣れていないことを鑑み、司会・進行を国際交流行事等に慣れている担当教員が行い、なるべく緊張をほぐせるよう考慮しつつ進めた。日本語のみしか話せない参加者と英語のみしか話せない留学生を支援するため、担当教員と両言語に堪能な留学生が各グループに英語と日本語の通訳として入った。日本語で意見を表明できない学生は英語で話し、通訳者が日本語に訳してグループのメンバーに伝え、日本語で述べられた意見は英語に通訳した。実際、会議の開始時、留学生に慣れていない移住者は遠慮がちになる傾向にあり、担当教員による支援と快適な雰囲気作りは不可欠であった。本会議の内容と進行について表5に提示した。

表5. 国際交流会議の内容と進行のスケジュール

国際交流会議の内容と進行のスケジュール	
1.	異文化理解についての留学生インターンの体験の発表（全体）（13:40-14:00）
	恒松直美（担当教員）ご挨拶（13:40-13:45）
	留学生インターン1（13:45-13:50） / 留学生インターン2（13:50-13:55）
	質疑応答（13:55-14:05）

2. 各グループでのディスカッション（各グループで行う）（14:10-14:55）
各自でまず思案（14:10-14:15） 各グループで討議（14:15-14:55）
＜ディスカッションのテーマ＞
- 留学生と江田島移住者との共通点
 - 外国人が江田島に移住した場合、どのような支援体制が必要か
 - カルチャーショック（留学生の日本留学での体験や日本人に対して感じていること、移住者の方の江田島移住における体験）
- *各グループを6～8名で構成（留学生・教員・江田島市役所職員・移住者・支援員）
*各グループでインターンが司会・進行を担当。日本語が上級でない留学生のため通訳者が日本語と英語の通訳を担当（各グループの通訳担当を指定）
3. 各グループの感想の発表（全体）（14:55-15:15）
- *各グループより代表が感想を発表
 - *江田島について聞きたいことがあれば質問

本会議は、参加する広島大学短期交換留学プログラム留学生の多様な文化的背景と言語能力を生かして進められるものにした。参加者全員が日本語で意思の疎通が可能でなくとも、英語と日本語に堪能な者が支援し皆で協力して支援し合うことで、有意義な国際交流会を開催できることを地域の人々に伝えられるよう心がけた。

1) 異文化理解についての留学生インターンの体験の発表

まず、アイスブレイキングとして、本企画を担当した留学生インターンが、自らの日本留学中の異文化体験を話した。日本で驚いた食習慣や自らの体験で感じた日本人の特性などについて2人のインターンが述べ、笑いとともに和やかな雰囲気での会議が始まった。インターンはスピーチ開始の挨拶まで気を遣い準備をしていた。

2) 各グループでのディスカッション

交換留学生と江田島市職員及び移住者とで行うディスカッションのテーマは、地域にある日本の大学に留学した交換留学生と江田島市への移住者との共通点とした。相互に意見交換ができ議論が活発になるテーマを教員が選択した。主に以下の3つのテーマを各グループでまずディスカッションし、代表がまとめを発表する形式にした。

- (1) 留学生と江田島移住者との共通点
- (2) 外国人が江田島に移住した場合に必要な支援体制
- (3) カルチャーショック（留学生の日本留学の体験・移住者の江田島移住の体験）

ディスカッションの内容を書き込むシートを教員が用意し配布した。教員が通訳として参加したグループでのディスカッションと各グループの発表をもとに、ディスカッションの内容の要点を以下に整理した。

表 6. 「国際交流会議」における交換留学生と移住者によるディスカッションの内容

留学生と移住者の共通点	<ul style="list-style-type: none"> ● 知らない地域社会の輪の中に入るのは困難である。 ● 留学生はなかなか日本人の輪の中に入りにくい。 ● 習慣などの違いに驚いた。
江田島市を国際化する方策	<ul style="list-style-type: none"> ● 江田島市はフェリーを利用すれば広島まで近い。江田島市に宮島と同じ鳥居を作れば観光客を惹きつけられる。 ● 「江田島大学」を作り、若者と外国人を招聘する。将来的に交換留学生も大学講師として赴任する。
江田島の地域性	<ul style="list-style-type: none"> ● 「原住民」の人々は、人と人の親密性を保っている。例えば、近所への訪問では、玄関で声をかけ、即家の中に入る習慣が残るなど、人々の間に温かさが感じられる。 ● 民泊を地域活性化政策として進めているが、宿泊した高校生が、とれた野菜や魚を近所の人に持っていく近所間の交流や物々交換の習慣に驚き、うらやましがっていた。
外国人が日本に居住する困難	<ul style="list-style-type: none"> ● ベジタリアン（菜食主義）や健康の理由により食べられるものに制限がある際、何が食べ物に入っているかがわからず不便である。



「国際交流会議」風景



江田島市沖美町「夢来来 交流ゾーン」にて

結語：交換留学における日本の地域社会での社会体験の意義

自国でも日本でも社会体験を持たない交換留学生インターンが「グローバル化支援インターンシップ」を成功させる鍵は何であろうか。1 つは、交換留学生の特性を生かすことである。HUSA プログラムの特性は、文化の多様性を持つ多国籍の学生がプログラムに在籍し、グローバル・コミュニティを形成していることである。つまり、多様な異文化の背景を持つ留学生がプログラムに在籍し、多様な言語と文化の知識を提供することが可能であり、それをグローバル化に直面する日本社会への支援に生かせることである。この特性は交換留学生インターンの最大の強みである。2 つ目は、HUSA プログラム留学生が日本語と日本文化に強い関心を持っていることである。イ

インターンシップの最大の課題は、留学生インターンの日本語能力と日本社会の理論的理解が、実際に業務をこなすレベルに至っていない厳しい現実である。しかし、留学生の異文化性と日本文化への強い興味という2つの特性が組み合わさった時、日本社会において特殊な価値を持つ。交換留学生は、日本人が持ちにくい外国人の生きた知識を日本に貢献できると同時に、日本社会への強い興味から日本を世界とをつなぐ可能性を持つ。

チームで協力し仕事を進める「グローバル化支援インターンシップ」を実現するためには、授業のマネジメントの創意工夫と徹底した留学生インターンへの指導を要する。指導教員の総括的監督のもと、インターンの多様な知識と日本語能力を生かし、チームで協力するシステムを構築することが不可欠となる。1年間のみ滞在し、毎年入れ替わる交換留学生のインターンシップを可能にする方策として、チームとして機能させ、学生間の協力と情報共有により、インターンが相互の体験を生かし、相互の改善を支援し合うシステム作りが必要となる。

2013年度の授業では、新規に開講した2012年度の「グローバル化支援インターンシップ」の授業での教育成果を生かした授業の構築を目指している。前年度のインターンの経験を生かすことにより、過去の成果を次年度につなげて留学生の経験を累積的に役立てることができる。例えば、2012年度のインターンが作成した議事録や社会人としてのマナーなどの指導マニュアルを本年度の留学生インターンの指導に使用している。これらの過去の体験や失敗談に基づいて作成した資料の使用は、インターンが日本社会と接するうえでの現実的対応策として大変有益となっている。さらに、過去のインターンが作成した指導教材は「期待マネジメント」としても機能する。過去の教育成果としての書類を閲覧することにより、内容の重要性のみならず、インターンに要求される仕事の能力のレベルを確認する機会となる。

交換留学生が約1年の日本の大学への交換留学中に、日本の実社会と直接関わる体験を持てるかどうか、その体験が大学教育とどう関連付けて提示されるかは、日本への留学を学生がその後の人生にどう生かしていくかに影響する。2012年度に新規に「グローバル化支援インターンシップ」の授業を開講して以来、交換留学生がインターンシップを通じて見せる成長と変容を常に見てきた。日本社会と連携し仕事を進める過程で、学生として甘えていた態度では通じない厳しさを体験する。「学生主導型」で進める本インターンシップは、インターンの意識変革が不可欠であり、そのための授業方法の開拓は新しい課題であり続けた。また、厳しい授業についてくるためにはインターンの意志の強さが求められる。

「グローバル化支援プロジェクト」成功に向け、日本語で地域社会と連携して仕事をする新しい挑戦において、留学生インターンは、自己決定をする多くの機会を持つ。経験不足から仕事への責任感が不足していたり、自己決定をして進める勇気が持てな

いことも多々ある。同時に、自ら考えたことがプロジェクトに反映され、生かされることにより、自己決定をする場を持つことに喜びを感じ、エンパワーメントする姿も見えてきた。プロジェクトを成し遂げる過程で、幅広い視野から統括的に多くの事柄を考えなければならない状況におかれ、予測不可能な現実的状况が発生する現実を知り、それに対応してこそ実現することを学ぶ。1年間の留学期間に、日本社会における儀礼を学び、会議での議事録を作成し、プレゼンテーション能力をつけ、リーダーシップを発揮して仕事を成し遂げるのは、大きな挑戦であり、時に無謀であるとさえ担当教員が感じることも多々ある。

しかし、留学生インターンが、大学内で学生として過ごす快適ゾーン(comfort zone)から出る体験を持ち、厳しい指導を受けながらも変容する姿や強い意志を持って臨む姿を見ることにより、本インターンシップの授業の意義と授業の継続的な改善の重要性を感じる。本インターンシップは、国際性と地域性が交錯する現場で、交換留学生在が学問として学んできた日本語と日本文化の理論的理解を日本の実社会に応用し、学術知と実践知を統合させていく体験である。「グローバル化支援インターンシップ」は、留学生が自らのアイデンティティとグローバル社会におかれた日本社会との折り合いをどうつけるかを、自らの試行錯誤の実体験を通じリフレクションし、成果を作り上げていく場となりつつある。2014年度の「国際交流歴史ツアー」実施も決定し、インターンの挑戦は既に始まっている。前年度の経験を生かし、本年度はより新しい挑戦に挑む場を作り、より良い授業マネジメント方法を開拓していく。

注

- ¹ 以後、「広島大学短期交換留学プログラム(Hiroshima University Study Abroad Program)」を「HUSA プログラム」と称する。24ヶ国に渡る68大学とUSAC (University Studies Abroad Consortium)及びUMAP (University Mobility in Asia and the Pacific)の2コンソーシアムと協定を締結している(2013年11月時点)。「HUSA プログラム」に参加している留学生を本稿では「HUSA 留学生」と記載する。
- ² HUSA プログラム留学生向けインターンシップ授業では、アジア出身の学生が圧倒的な能力を発揮してきたと言える。北米やヨーロッパ出身の留学生も受講したケースがあるが毎年1~2名である。
- ³ 実際、この単位未取得の留学生インターンのリーダーシップによる貢献が、「国際交流歴史ツアー」遂行を可能にした。単位を取得していない学生が、単位の取得に関わらず、インターンとしてエンパワーメントし、リーダーシップを発揮した事例となった。
- ⁴ 恒松(2013)参照。
- ⁵ 「アクションリサーチ」とは、例えば、「望ましいと考える社会的状態の実現をめざして研究者と研究対象者とが展開する共同的な社会実践」と定義される(矢守 2010: 1)。
- ⁶ 広島大学短期交換留学生向けに2003年度から2011年度まで開講した「HUSA インターンシップ」については、例えば、恒松(2010)、恒松(2011)を参照。
- ⁷ 江田島市ホームページを参照。

引用

- 安部和厚、小笠原正明、西森敏之、細川敏幸、高橋伸幸、高橋宣勝、大雄二、小林由子、山舗直子、大滝純司、和田大輔、佐藤公治、佐々木市夫、寺沢浩一 (1998) 「大学における学生参加型授業の開発」『高等教育ジャーナル - 高等教育と生涯学習 - 』 第4号, 45-65 頁。
- 天野郁夫 (2004) 『大学改革 - 秩序の崩壊と再編 -』東京大学出版会。
- 江田島市ホームページ (<http://www.city.etajima.hiroshima.jp/cms/categories/show/165> 2013年10月14日)
- 恒松直美 (2013) 「交換留学生向け『グローバル化支援インターンシップ』 - 留学生の異文化性と日本社会の地域特殊性 -」『広島大学国際センター紀要』 第3号, 1-14 頁。
- 恒松直美 (2011) 「広島大学短期交換留学生インターンシップと地域企業の国際貢献 - 交換留学生インターン受け入れに関する地域企業の意識調査 -」『広島大学国際センター紀要』第1号, 51-65 頁。
- 恒松直美 (2010) 「短期交換留学生向けインターンシップと日本人学生の参加 - 国際的視野からのキャリア教育 -」『広島大学留学生センター紀要』 第20号, 23-39 頁。
- 矢守克也 (2010) 『アクションリサーチ - 実践する人間科学 - 』新曜社。

謝辞

2013年4月21日の「江田島国際交流歴史ツアー」の実現にあたり、江田島市役所総務部企画振興課の皆様及び山中貢氏には多大なご支援をいただいた。江田島御出身の山中氏は当日ツアーに御同行下さり大変心強い励ましをいただいた。「田舎暮らしを楽しもう会会長」の清水昭彦氏には会の皆様にお声がけいただきご支援をいただいた。皆様のご支援と暖かいお心遣いなしに、交換留学生のためのこのような心に残るツアーの企画は実現不可能であり、ここに敬意と感謝の意を表させていただきます。